



消防大学校だより

上級幹部科における教育訓練

消防大学校では、消防に関する高度な知識及び技術を総合的に修得させ、現に消防の上級幹部である者の資質の向上を目的として、総合教育「上級幹部科」の教育訓練を実施しています。

令和7年度の第89期では、48名の学生が1月20日（火）から2月5日（木）までの17日間にわたる集合研修を行いました。

研修では、大沢消防庁長官の講話をはじめ、消防庁幹部による最新の消防行政の動向について、リモートにより講義を行っていただくとともに、消防大学校客員教授等による幹部としての組織観、身体管理、消防管理概論やトップマネジメントなどの講義、全国消防長会市川会長による講話を通して、組織の上級幹部として必要な知識、役割や心構えについて修得しました。

指揮シミュレーション訓練では、大規模災害等発生時における、受援都道府県、被災地消防本部及び緊急消防援助隊の役割等について理解を深めました。

また、今年度は昨今の受傷事案等を鑑み、新たに安全管理に関する講義及び安全管理体制の見取り訓練を行ったほか、危機管理広報の実習では、組織内で不祥事が起きた際の報道対応（模擬の緊急記者会見）を行い、危機事案発生時の適切な広報技術の向上を図ることができました。

東京消防庁災害史安全教育室への視察研修では、先人たちの消防に対する限りない情熱と崇高な使命感・責任感を目の当たりにし、「殉職者を絶対に出さない」と決意を新たにしました。

そして、課題研究では「持続可能な消防組織とするために、今からできること、やるべきこと」を共通テーマに取組、その成果を発表しました。その中で、人材の確保・育成、ハラスメント防止、広域化など多角的な視点から具体策を提示し、実行可能な施策を模索しました。

研修を終えた学生からは、「全国の消防本部の仲間たちとの顔の見える関係が作られたことは、自身の消防人生の糧になったと思います。」「全国共通の課題に対し、各自治体、消防本部がどのように向き合い、工夫を凝らしているかを直接聞くことができたことは、非常に刺激

的でした。」「受傷事故、殉職事例を知り、幹部として部下を安全に家族のもとへ帰す責任を改めて感じた。」「理論と実務を往還しながら、組織運営・人材育成・危機管理について体系的に学ぶことができ、幹部としての視野と判断力を大きく広げる有意義な研修であった。現場に直結する内容が多く、今後の消防行政・部隊運営に直ちに活かしていきたいと感じた。」などの感想をいただきました。

さらに、消防大学校の講義だけでなく、東京消防庁・横浜市消防局の学生が中心となり週末を活用した視察研修を企画し、東京消防庁の第八消防方面本部他並びに横浜市消防局本部庁舎の視察を行うなど、様々な体験や学びを得るとともに、学生間の絆が強固になるこれらの取組については、上級幹部科の伝統として今後もぜひ引き継がれていくことを期待しています。

結びに、本大学校で学ばれた知識と磨きをかけた判断力、さらには全国の仲間と築いた絆を活かし、所属における的確な消防行政運営により住民の安全安心を実現するとともに、社会環境の変化に対応しつつ持続する消防組織の構築に邁進していただきたいと思います。



長官によるリモート講義



指揮シミュレーション訓練



安全管理体制の見取り訓練



NBCコースにおける教育訓練について

消防大学校では、令和8年1月8日（木）から1月29日（木）までの3週間にわたり、第15回緊急消防援助隊教育科NBCコースを実施いたしました。本コースは、NBC災害対応要員等を対象とした幹部教育課程であり、NBC災害対応業務に必要な知識及び能力を修得することを目的として実施しております。

NBC災害においては、初動対応の適否が被害の影響及び救命率に直結します。そのため本コースでは、初動段階における情報収集と状況判断の重要性を重視しました。日本中毒情報センターの講師からは、原因物質特定のために必要な情報収集項目、問い合わせ要領、関係機関との連携体制について具体的に学び、科学的根拠に基づく判断の重要性を再確認しました。あわせて、錯綜する情報の整理や活動方針決定までの思考過程を体系的に整理し、幹部として求められる統括的視点を養いました。

また、放射線災害への対応に関しては、「放射線を正しく理解し、正しく恐れる」ことの重要性について学習しました。放射線の基礎知識、被ばくの種類と影響、測定器の特性、防護の原則（時間・距離・遮へい）等を科学的根拠に基づいて整理し、合理的かつ冷静に行動するための知識を修得しました。加えて、日本アイソトープ協会においては、実際の線源を使用した実習を実施し、サーベイメーターを用いて線量の変化を測定しながら、防護の原則（時間・距離・遮へい）の効果を実測により確認しました。理論と実体験を結び付けることで、放射線対応に必要な確かな理解を深めることができました。

さらに、NBC事案においては多数の傷病者発生が想定されることから、広域応援体制及び受援体制に対する正確な理解が不可欠です。発災地消防本部のみならず、緊急消防援助隊との連携活動を前提として、講義及びシミュレーション訓練を実施しました。加えて、受援アドバイザーから専門的見地に基づく講義並びにシミュレーション時の助言を受けることで、広域応援の枠組みや受援調整の要点について体系的に整理し、受援体制に関する理解を一層深化させることができました。

講義科目では、消防庁職員による施策の動向、安全管理、現場活動の基本方針、国民保護制度等についての講義で制度的背景を踏まえた活動の在り方を整理しました。また、化学災害・生物災害対応、テロ対策、NBC災害時の医療対策については、各分野の専門家を招聘し、最新の科学的知見と実務的課題を踏まえた内容を学習しました。

特に、「化学災害又は生物災害時における消防機関が行う活動マニュアル」の理解の深化を重要課題として位置

付け、改正の趣旨や実務への反映方法について専門的かつ実践的な解説を受けました。学生は所属本部の地域特性、人員体制、保有資機材を踏まえ、より実効性の高い活動方策を検討する視点を養いました。

訓練では、東京消防庁、横浜市消防局、川崎市消防局及び千葉市消防局の教育支援隊の協力のもと、情報収集、ゾーニング、資機材運用、除染活動等を段階的に実施しました。除染活動では実際の生体を用いた訓練を行い、防護服装着下での活動の困難性や多数同時対応時の課題を体感することで、実践的対応力を強化しました。

また、今回新たな取組として、NBC事案を想定した多数傷病者対応訓練を導入しました。防護服の選択、ゾーン設定、除染方法の決定、救出及び搬送優先順位の判断までを一連の流れとして実施し、講義・図上訓練・実科訓練を有機的に連動させることで、複雑化する事案に対する総合的対応能力の向上を図りました。

さらに、地下鉄サリン事件から30年が経過した現在においても、神経剤を用いたテロ事案への備えは重要です。本コースではDMAT医師等を招聘し、神経剤解毒剤の自動注射を含む実践的研修を実施しました。早期投与の意義及び安全管理上の留意点を学ぶことで、救命率向上に資する対応能力の強化を図りました。

本コースは、講義・展示・実科訓練を体系的に編成し、単なる知識習得にとどまらず、「考え、判断し、行動する」実践的対応力の向上を主眼とする教育課程です。

消防大学校では、国民が安心して生活できる社会の実現に寄与するため、社会情勢や災害環境の変化を的確に踏まえ、実効性を重視した教育プログラムの継続的な充実と高度化に引き続き取り組んでまいります。



C災害対応訓練の様子



多数傷病者対応訓練の様子

問合せ先

消防大学校教務部
TEL: 0422-46-1712